特250
734

京都離宮要誌

古建築及庭園研究會發行

始

特250
734

京都離宮要誌

目次

一　仙洞御所……一
　林泉……二
　大宮御所……四
二　二條離宮……六
　二の丸殿……九
　林泉……一七
三　修學院離宮……八
　上の御茶屋……九
　中の御茶屋……二
　下の御茶屋……二三
四　桂離宮……二五
　宮殿……二六
　林泉……三〇

本會で蒐集した京都離宮に關する文獻の中で、各離宮の案内を最もよく書いたと考へられる「京都離宮要誌」といふ寫本を刷印して會員の座右に獻ずることゝしたのは、此書に依つて吾等の仕事がより多く說明されると思ふからであります。

此書は何人か離宮に深い關係のあつた人が案内用として明治の中年頃に書いたものと思はれます、偶日諸君が離宮拜觀の機會を得られた時、最もよい手引となるであらうと信じます。

昭和四年一月

古建築及庭園研究會

京都離宮要誌

仙洞御所

皇宮の東南にあり、北は上長者町より南は下立賣に至り、西は皇宮東垣より東は寺町通に至り西北は大宮御所に隣る、地積二萬二千五百六十二坪あり、舊大内裏時代の桃花坊に當り藤原氏の土御門殿京極殿の地に係れり、むかしは金殿玉樓甍を聯ねしも、其後星霜幾變遷、兵塵劫火前後相繼ぎて應仁以後は既に寒煙荒草の廢墟たりしならむ、豐太閤既に覇業を成し正親町帝の爲めに仙洞を營まんとの計畫ありしも偶崩御により て德川氏に至り、後陽成帝の爲めに營みしものは今の皇后御殿の地にして皇居の北位朔平門内に當れり、後水尾帝位を遜れ給ひ德川氏の出なる明正帝女儀を以て大統を繼がせ玉ふに及び、幕府上皇の叡慮を慰め奉り且つ以て物情を鎭せんとし、爲めに仙洞

を營し土木を窮極して仙遊の所となし櫻町宮と稱す、卽ち今の仙洞御所これなり、其後延寶元年をはじめ天明八年安政元年等三回の炎上あり、隨て燒くれば隨て作り、最後の回祿に至り當時上皇の在しまさゞりしかば、幕府は單にその外垣のみを修理して宮殿造營の事なし、以後宮殿の遺趾は茂草に委せしも、その林泉は舊時の觀を改めずといふ。

林泉　皇居の東南隅に當り茂林修竹鬱然たるもの卽ち仙洞御所の林泉なり、德川氏後水尾上皇の爲めに特に意を用ひて作りたるものにして、其老樹の數百千年にも上ると見ゆるものあるは、前に述べしが如く此あたりは藤原源平氏以後までも名公巨族の第宅ありし跡なれば或は當時の遺物の存するにあらざるか、却說林泉は東深林を負ひ西に向ひ舊常御殿より正面に望むべき樣に築きたり、東西凡一町南北三町許、中に大池を穿ち加茂川の水を引き、懸けて飛泉となし池に入る、潭光滉瀁、水深く底暗し、怪岩奇石龍蟠虎蹲、前に峙ち後に伏し茂樹蜜林と雄奇を相爭ふなど、深山大澤に入るの概あり、今西部より順を逐ひ之を細記すべし。

舊常御殿東芝の御茶屋跡の洞門より東に出づれば一面林泉なり、池に沿ひ左折すれは長橋あり、舊は八橋の構造なりしといふ、左右欄干あり藤架之を覆ふ、橋を過ぎて中島二あり葭島及蓬萊島と名く、左に瀧殿の遺趾あり東北に池を隔てゝ瀑布を望む、島の中央に大理石の燈籠あり、島中四望風景最も佳なり、舊小亭あり御腰掛といふ今は無し、進みてひがし舊鑑水御茶亭の遺趾に至る、左右深潭に臨み碧水鑑みるべし故に名く、東方に御舟附ありこれより東北一路石徑崎嶇として老根盤錯す、阜を越へ溪に下り一大石橋を渡り、水に沿ひ北すれば巨石嶙々として水邊に駢列し飛泉上に懸る、また小阜に上り瀑布の上流を渡り西北に向へば、忽ち斷崖數丈西方の山と峙對す、中に一橋を架す橋高く水遠し橋を過ぐれば左に藤架の橋を望み右は池面再び開けて別に一潭を成す、傍ら楓樹多し紅葉山といふ、また北に進み蘇鐵山に入る蘇鐵叢生す、傍ら櫻花棣棠交錯せり、茶亭あり又新亭といふ、衞門茅檐築構極めて幽雅なり、此の地はもと修學院の止々齋を移されし所なりしが、廢頽して近年此亭を立てられしなり、更に池に沿ひ東すれば楊柳影暗くして下に石橋を架す、橋を過ぐれば北方別に一潭あ

り、奇岩巨石四周に礧砢たり阿古瀬淵と曰ふ、蓋し此地の古稱なり、近時紀貫之古跡碑を立つ、碑北に小渠を開き水を通して池に入る、渠を渡れば小阜あり壽山といふ、鎭守小祠西に向ふ、祠の面稻田あり昔時御料の民を召して耕作せしめ稼穡の艱難を覽給ひしといふ、これより南水に沿ひ阜に躋り行くこと數百歩、鑑水亭の舊趾に出で、左山に傍ふて登り數百歩にして悠然臺の趾あり、西下して南水邊に出づれば醒花亭に至る、茶亭なり、結構淡雅樹竹清楚、亭上より北望すれば林泉の形勝みな眸中に收まり橋を隔てゝ飛瀑を見る風景甚だ佳なり、更に北に進む水邊に小圓石を敷く、團々として碁石を置くが如し、上に櫻花を併ひ植う、左は卽ち舊常御殿のありし遺趾にして、今は一面の空地となれり、以上は林泉の大形にして總地積二千八百餘坪あり、希有の大林泉にして樹石皆古く潭水深碧なり、沈鬱老蒼の中に瑰奇雄大の氣象を帶ぶ、また有數の名園なり。

附　大宮御所

仙洞御所の西北隅にあり、寛永中幕府女院の爲めに造進せし所にして、仙洞と長廊を以て相通せしが、數回の回祿にかゝり安政火災には仙洞と共に烏有に歸し、其後幕府の再造せしもの維新後に至り主要の一部を存し他は一切毀撤せられ今は常御殿はじめ附屬の屋舍のみ存せり。

二條離宮

離宮は卽ち舊二條城にして德川氏の建設せしものなり、東照公既に關原の戰に克ち一統の業畧成るを以て關東を以て根本の地となし、更に京都形便の地を撰み輦下の鎭營となし且つ上洛の時駐旆の所と爲さんと欲しこゝに城きしものなり、世に織田氏の創建せし如く傳ふるものは武衞陣二條新御所及び二條第等のその傍近にあると、年代も相遠からざるにより混淆して誤りたるものか、此地往古は大內裏の東南隅にして其後豐臣氏聚樂第の南に當り、當時は既に一面の廢墟となりしより、慶長七年初めて工を興し同八年には畧〻落成せしが、其年三月廿一日家康入城の事梵舜日記に見ゆ、德川氏既に大阪を陷れてより禁裏法度を立て此城にて決行し、また足利豐臣二氏に倣ひ車駕の臨幸を請はんとし、益々宮殿を修め華麗を窮極し、更に伏見城の天守を始め殿舍を移し本丸を築き、寬永三年九月後水尾帝の行幸を請ひ奉り、天下の公伯を率ひ御前に盟ひ武威の盛事を極めたり、同五年仙洞造營の時、行幸殿を始め許多の宮殿を毀

ち仙洞に移し、其後十一年家光三十萬兵を率ひ上洛し此に駐旆し大に武威を耀したることあり、其後本丸天守櫓樓等は回祿にかゝり烏有になれり、其後二百年を經て將軍家茂上洛のとき、再びこゝに駐在し引續き慶喜公もこゝに在りて大政返上の表を呈したり、王政復古に至り本城は朝廷に歸し、明治元年正月廿七日勅して太政官代となし、二月三日天皇御臨幸あり親征の詔を頒ら給ふ、四年三月京都府の管掌する所となり假に府廳となし六年二月陸軍省の管轄となり、十七年七月改めて離宮となし其翌年府廳を他に移し大に修理を加へ四圍の堞壁を毀ち上壘を築き、廿六年に至り御苑中にあり桂宮の宮殿を本丸遺趾に移されたり、かく許多の沿革變遷を歷たりと雖も、當時覇業の餘力を以て武威を誇耀するの目的に成りしものなれば、築造結構の大形より用材彫繪の微細に至り、皆な心力を傾注して華晥瑰麗を極め、光怪陸離人目を奪ふに足るものあり、今其の形勢建築粧飾等の大畧を左に記載すべし。

本城地域は古代桃花敎業二坊に跨り、北は大炊御門より南は押小路に至り、東は堀川より西は櫛笥に至り、東西に長方形を爲し南北面半以西の處にて屈曲して少しく狹

くなり凸字形を爲す、凸字頂上の處を西面とす、東面一百九十七間半西面は八十三間半北面二百五十五間南面二百七十三間、總面積八萬三千坪其内廊内六萬二千三百四坪、廊外一萬八千十三坪、内濠五千三百三十九坪、外濠九千二百九十三坪、池四百八十三坪、宮殿建坪二千百十八坪にして外廊中央以西に本丸あり以東に二の丸あり。

本丸は東面八十二間半、西面八十五間半、南面八十四間八分、北面八十二間半、堀の廣さ十四間、東西二所に橋を架す、昔は西南隅に天守臺あり乾艮二方に櫓あり、殿宇宮觀其中に突兀たり、皆小堀遠州の指圖に成り美觀を極めしも、天主は寛永三年雷火に、本丸殿宇等は天明火災に類燒し殆んど荆棘に委したりしを、明治二十六年桂宮の建物を移されたり。

二の丸は外廊東大手門内にて本丸の東にあたり、橋を以て本丸と相通ず、面積九千六百三十三坪餘、繞らすに築垣を以てす、宮殿林泉みな昔時の遺物にして、家康以下上洛の時の館舍に充てたるもの、今は離宮の正殿となれり。

本丸二の丸以外は卽ち外廊にして、昔時は組士の小屋米倉等ありしも、今は一切取

拂ひ廣漠なる平地とはなれり。

二の丸宮殿 東大手門より少しく西して南向に唐門あり、門内數十間にして御車寄あり、また南に向ふ、是を第一殿とす、殿屋南北榮にして北向なり、遠侍の間、若松の間、芙蓉の間、殿上の間を經て、上段の間、二の間に至り、相鱗次して方形を成し、西南角に遠侍廣椽あり、曲折して兩方を繞る、廣椽の西は式臺の間、老中の間、三の間を併せ第二殿とす、三の間より西第三殿に入る、大廣間、二の間、三の間、北の間を總稱す、蘇鐵の間を經て西北第四殿に入る、溜の間、二の間、三の間、菊の間を過ぎ上段の間に出で、長廊を過ぎ北第五殿に至る、卽ち最北部の別殿にして、構作粧飾等皆制を異にす、凡そ宮殿全部の大形は東南より西北に延き、屈曲雁行し、飛棟傑閣半空に突兀たり、全部瓦葺白木造にして、材は最も精美を撰み、天井戸障子の繪畫欄間の彫刻等、金碧絢爛人目に照耀す、今その萬一を左に記述すべし。

唐門 また鍮石門といふ、二の丸南面の正門にして、欅白木造り檜皮葺、下はみな甃石なり、柱の彫刻竹に虎、梅に雲龍、牡丹に獅子、蛙股北面は龜上仙人、松牡丹に

鳥、同上南面は龜に岩、松、牡丹等、みな彩繪を加へ金物には赤銅斜子地金滅金にて牡丹唐草等を刻し、菊の御紋を附け粧飾美觀を極む、門内一面芝生松を植ゆ、正面に御車寄あり。

御車寄　南向檜皮葺甃石等唐門に同じ、正面唐戸彫刻は唐松に牡丹、竹に鳳凰、東面洲濱形、松竹梅、鷹、蛙股中獅子西方は芍藥に綬帶鳥、格天井鏡板に欄を用ひ、棹を黑塗とす、階數級を昇り第一殿に入る。

第一殿　假に上段の間を始め次の間遺侍の間芙蓉の間若松の間等を併したる一大殿の名稱とす、離宮中最大なる建物にして惣坪數三百四十坪餘あり、南北榮瓦屋四阿搏風唐草大金物及び菊花御紋章等金色煌耀たり、内部四方に内椽外椽あり、襖長押上杉戸等の畫はみな探幽或は其門人の筆にして、釘隱は赤銅滅金大金物結袋形葵唐草等を用ふ、今各間に別ち之を記すべし。

上段の間　二十四疊もと勅使參向の間に充てしを以て勅使の間ともいふ、床脇違棚御帳臺等共に楓樹を畫く、袋棚の畫、梅、櫻、山吹、芙蓉等、金物赤銅滅金、天井黑塗緣金地彩色の花形を繪く。

二の間　三十五疊、南側金張附に大樅樹を畫く、椽側障子腰張花鳥の繪は桃山より移したるよし、天井繪樣上段に同じ、欄間の彫刻は松と牡丹に錦鷄なり。

遺侍の間　九十五疊金地襖の畫竹に虎、天井黑塗緣、金圓形に彩繪種々、周回に麻の葉を畫く、欄間二ヶ所の彫刻は松に牡丹なり。

遺侍入口の間　一の間二の間三の間合せて百疊、繪彫粧飾大抵遺侍の間に同じ。

若松の間　二十四疊襖及び長押に稚松と櫻花を畫く、天井は紙張緣黑塗、畫は金地に葡萄。

芙蓉の間　二十五疊、襖の畫、桃、竹、雀、紫陽花、小鳥等、次の間は西方に隣る、光線の達せざるを以て世に暗がりの間と稱す、内椽杉戸四ヶ所、杉の大板に芍藥、萩兎、竹虎、群羊、柳、紫陽花、四十雀、豆鳥、蘆雁等を畫く、廣椽に出で第二殿に入る。

第二殿　第一殿の西に隣る、式臺の間、老中の間、一二三の三間及び槍の間を併せ

たる一殿なり、今各間の裝飾を記すべし。

式臺の間　四十五疊、南向す、北側張付に大松二株を畫く、西南東立棧腰高障子の畫、砂子に彩色稻田に雁花竹等なり。

老中の間　式臺の間の北にあり、舊時將軍上洛の時老中の詰所に充てしものといふ、一の間十二疊、襖の繪、刈田、雪雁、芦雁、柏樹、二の間十二疊、繪畫同上、三の間十二疊、襖の繪、雪柳に白鷺、入口東の方に竹に虎と眞向獅子などあり、獅子の畫は眞向にして八方睨みと稱して世に名高し。

槍の間　三十八疊、老中の間に隣る、杉戸東の方兩面櫻に尾長鳥、枯木に豪豬、西の方兩面紅葉柏に鹿の畫、筆者詳ならず、或は探幽ならんとの說あり、是よりまた西北第三殿に入る。

第三殿　假に大廣間、二の間、三の間、北の間、蘇鐵の間を併せて稱す、第一殿に亞ぐ大厦にして東西十四間半南北十六間、總坪百八十九坪あり、南北榮四阿にして摶風に大金物あり、內部釘隱は赤銅滅金花熨斗形なり。

大廣間　五十疊、第三殿西北隅にあり、上段あり舊時將軍の謁を受くる所なり、床には欅の一枚板厚六寸丈三間なるを用ゆ、張付に大松を繪く、違棚張付の繪は竹、袋棚小襖水仙、牡丹芙蓉、菊等を繪く、附書院障子の腰板は金地に亂れ咲き水仙なり、長押上は松、天井は金地總模樣、御帳臺は十四疊にして、襖黑塗緣、鴨居敷居等の緣金物は銅滅金斜子地に唐艸鳳凰、畫は岩に錦鷄、薔薇、芙蓉、水葵、芦、千鳥、內金張付に神祠、芙蓉、水葵、小鳥、長押上は武藏野の薄に月なり。

二の間　四十四疊、襖金張四枚、畫は松に孔雀、南入口戸及び長押上の畫も同上なり、組天井畫は翠青地、金にて崩れ網の內に彩色花形、欄間の彫物は牡丹に鳳凰なり。

三の間　四十疊、金襖より長押上にかけ巨松を繪く、欄間彫刻は牡丹に唐松、孔雀、薔薇、天井は二の間に同じ。

北の間　七十五疊、襖金地に大松樹と鷲を畫く、組天井の隅取角に金泥孔雀四隅蝶と花崩しにて彩色地は鳶色なり、欄間の松に牡丹の彫刻は左甚五郎作といふ、杉戸の芦雁、雪中柳鷺、枯木雪景、松に鷲、竹に雀、枇杷栗鼠、櫻柏に鷺、柳に鷺、垂枝櫻、

柏に鳩、群羊等なり。

蘇鐵の間　五十疊、長廊なり南入口杉戸の繪蘇鐵八重櫻岩に白鷗等、もとは壁の張付にもみな蘇鐵を畫きしに破損したるより明治十九年修繕して全部壁紙を貼付せり、釘隱金物は二重赤銅滅金葵崩し六つ出形なり、北出口より黑書院に入る。

第四殿　東西十五間南北十一間半、南北榮搏風制粧飾第二殿に同じく、釘隱しは赤銅滅金大熨斗形、諸殿中最も莊嚴華麗を極めし宮殿なり。

黑書院　即ち上段の間なり、二十四疊、敷居黑塗床は二間半厚六寸欅の一枚板を用ふ、張付畫薄雪松に鴛鴦四十雀等、違棚二ケ所南面三段、袋棚小襖四枚、畫は浦漁獵、裏墨畫瓜花卉、棚下張付畫は柴垣に薄雲にて御床に續く、西面四段袋棚小襖四枚、畫は南面に續く、裏面に樹木花卉等、張付は菊に胡蝶花鶉、附書院欅板一丈、腰障子畫山水右張附に月李花根笹、鴨居上は白木組物、長押上山家人物櫻花等、格天井繪模樣は萠黃地に向ひ鳳凰、御帳臺十四疊、襖黑塗緣金物赤銅滅金葵崩し唐草、鈕に眞紅組紐華蔓總付となし、畫は海邊景色、內張長押上は金張付、畫種々。

二の間　三十一疊、襖及び北側袖壁等金張、畫は網代垣八重櫻群鳥、長押上の畫水邊樓閣、鴨居上白木組物あり、格天井辻金物あり、畫模樣は丸形五彩畫種々。

三の間　三十五疊、二の間の東にあり、襖畫霜白鷺及び海邊松樹、天井二の間に同じ。

四の間　また菊の間といふ　二十八疊、三の間の北にあり、上段の間御帳臺の東に隣る、襖壁等皆金張付にして畫は竹籬亂菊、浮上げ極彩色なり、長押上薄に蒔扇、扇面の畫花鳥山水等、天井繪模樣金地丸の內に花形紗綾形等。

溜の間　六十六疊、三の間四の間の東にあり、西北襖張付牡丹小鳥、東側戸の張付の畫梅なり、東杉戸の畫花臺花籠に百花亂挿の圖、及び泊舟雨鷺、世に濡鷺の杉戸と稱す、西杉戸の畫は枯木に蔦、鳥鵲墻に牽牛花等、枯木の畫殊に著名なり、杉戸の上欄間彩色彫物牡丹、芙蓉、笹、瞿麥、岩、雀、尾長鳥なり、其他花卉翎羽甚だ多し、是より長廊を過ぎ北第五殿に入る。

第五殿　離宮中最北に位する一殿にして、南北榮搏風に滅金大金物菊御紋章を付す、

昔時將軍上洛の時燕居の室に充てたるものなり、内部粧飾等總て楚澹瀟洒を主とし、繪畫筆者はみな狩野定信なり、上段の間を白書院といふ。

白書院　第五殿の西北隅にあり、廣十五疊、床違棚付書院御帳臺あり、床襖長押上共紙地金泥引薄彩色にして極めて優美なり、床疊敷塗緣張付畫山水、違棚袋棚小ま畫薄彩色紅白瞿麥、附書院欅板、障子腰畫山水漁舟、黑塗緣格天井繪模樣青地金團扇形の内花枝鸞鳥、長押上畫水邊樓閣遊船人物等。

二の間　十八疊、上段の南にあり、襖長押上及び西南戸張付の畫模樣等上段に同じ、格天井繪模樣は丸形に牡丹折枝崩し。

三の間　十八疊、襖畫薄彩色山水人物、天井二の間に同じ。

四の間　十八疊、三の間の北にあり、襖畫雪中竹木に睡雀の畫あるにより、睡り雀の間と稱す、天井同上、花崩しの丸形、紙は鳶色なり。

東南の間　十八疊、東南隅にして三の間の東に隣る、東の方昇降口あり、杉戸及び板張りに翎毛花卉等彩畫甚だ多し。

林泉　大廣間と黑書院の西南にあり、西は本丸の濠に接す、中に大池あり廣さ四百八十餘坪、加茂川の水を引き城内に入り瀑布となり池に注ぐ、池中島嶼洲崎を築き橋梁を架す、奇石怪岩向背突兀たり、本と樹木無し、作者の意は樹木の榮枯ありて林泉の觀を變ずるを恐れ故さらに之を栽えず、只水石の布置を以て一偉觀を作りたりといふ、近年雜樹を叢植し面目爲めに一變せり。

修學院離宮

高野川の東、比叡山の西、雲母阪の西麓にあり、地勢高阜に據り、前に松ケ崎の諸山を控へ、後は比叡山を望み、西南京都市一帯より五畿の山川を指掌すべき形勝にして、往古播磨守佐伯公行深く僧勝算に歸依し、爲めに一寺を創し修學院と名づけしを永延中官寺となし給へり、其後數百年にして寺は廢して村の名にのみ殘りしとぞ、徳川氏既に明正帝を立て、後水尾上皇の爲めに此の離宮を營して宸遊の所となしたるものにして、其創立年紀に付ては、或は慶安二年初めて行幸ありし如く記しあれども、林丘寺記に承應年間御遺營數度御幸云々の文あり、かゝれば後水尾帝御讓位の後、間もなく造營ありしなるべし、此後屢御幸ありて御老後の御娯となりしが、法皇崩御の後は修理もなく、鄰雲亭は法皇御在世のうち燒亡し再造の事も聞えず、靈元法皇の御時幕府へ其旨仰下され更に御幸の事あり、これより毎年數度の御幸ありて親から其記行を著はし給ふ、此時更に御茶屋も再造ありしなるべし、法皇崩御の後又久しく荒れた

りしを、光格上皇御幸の爲め大に修理を加へ、亭樹をも再造し、其面目を一新し、明治維新の後に至るまで幾回の變遷ありて今日に及べり、さて離宮は御茶屋と稱し、上中下の三所にして、東北にあるを上の御茶屋とし、稍西して南にあるを中の御茶屋とし、西にあるを下の御茶屋とし、三所高低相屬し鼎立の狀を成し、地積總計八萬四千四百三十五坪あり、上の御茶屋最も大にして、中下はみな十分の一にも及ばず、下の御茶屋の西に正門あり、東裏門を出づれば道二岐あり、南は中の御茶屋に通じ、東は上の御茶屋に通ず、輦路みな白砂を敷き青松道を挾む、兩傍田畑皆御料地にして村民に許し耕作せしめらる、地勢東に至り益々高く上の御茶屋に至る。

上の御茶屋 その位置の最高處にあるより名く、此の離宮中主要なるものにして、山を負ひ野に臨み眼界朗豁なり、中に大池を穿つ浴龍池と名く、嶋嶼洲崎遠近映帶し、花竹樹石前後相屬す、南門より入り右折すれば石磴あり、登ること百餘級にして一亭あり隣雲亭といふ、六疊と三疊の二間あり、構作清楚にして優美なり、離宮中の最高所にあり眺望絶佳にして京洛の城邑より五畿の山川みな一眸に集る、靈元上皇の「遠

方の山より上に雲よりも白きを見れはよとの川水」の御製能く實景を寫し給ひしものなり、亭の北に板間あり東北に向ふ、洗詩臺といふ、東山崖に瀑布あり雄瀧といふ、高さ四間餘、玉屑潺々危岩の間より下る臺の名の出るところなり、亭の西また小瀑布あり雌瀧といふ、亭前に光格帝御手植の楓樹ありしも已に枯れ更め植へしといふ、臺北曲徑を下り石橋を渡り行くこと數百歩、道岐れて二となる、左に一島あり小橋かゝる楓橋と名く、橋を渡り小阜に登る亭あり窮邃軒といふ、亭名の額は後水尾帝宸翰なり、上段六疊にして下は十三疊あり、園の中央高所にあるを以て、全園の景趣奇を呈し勝を競ひ悉く脚底に集る、西南また一島あり萬松塢といふ、過ぐるところの橋を千歳橋といふ、文政中所司代内藤信敦の進建にかゝり、兩端切石を以て高く橋臺を築き上に屋橋を作る、東を四阿屋とし鳳聲に擬して、屋頂に金銅鳳の花を含み風に舞ふ狀を作る、左右みな欄干擬寶珠あり、南北兩側腰掛を設け、遊憩眺覽の所となすなど、希有の構作にして頗る美觀なり、これを過ぐれば卽ち島なり、池の中央にあり、大小三島にして皆岩石なり、老松叢生して龍蟠蛟屈翠光滴らんと欲す、小亭あり四面洞開眺覽最も佳なり、窮邃軒に登り更に北に降る、苔徑羊腸として紅紫の躑躅肩を沒す、行くこと數百歩にして橋あり土橋なり、右に一島を望む楓樹多し紅葉谷と名く、秋晩霜錦叢を成し青松老翠と相映し畫中の景趣あり、また池に傍ひ西に旋る、池畔に御舟屋あり、路の北側に止々齋の跡あり、齋は園中最も大なる茶亭なりしが、後水尾上皇御晩年遐路の遊幸を厭はせられ仙洞中に移させ給ひしとぞ、少しく西して左池畔に御舟附あり、南に向ひ切石もて階數級を作る、左折して南に進む、左は池に傍ひ花樹を雜植す、池中所々に紅白蓮あり、菱花阿骨蓴菜等の水卉點綴せり、右は一帶の生垣にして高さ僅々腰に至り園外山野を望むに便す、更に進み東へ折れて正門内に至れば、則ち隣雲軒下にして、初めて園池を一周せり、大要林泉の構造は自然の勝地に據るを以て務めて天分を存し人工を省く、その西方遐近の山川をとりこめて園下の矚眺と爲したる如きは、趣向意表に出で、尋常園師の企及すべきに非ず、槐記に此林泉築造の事を記したるを見るに、地勢山水を御考へにて、雛形出來て草木をはじめ踏石捨石に至るまで、皆それ〴〵に土にて形をこしらへ、その所に置て見て恰好のよきやうにあ

そばし、其の七八分も出來たる時に御側の女中に庭巧者の人あり、ござ包の輿にのせ、平松一心非藏人某など付けられ、見分に遣はさるゝこと度々なりとあり、されば泉石の排置より花木の點綴に至るまで、皆宸襟を勞せられ、輔くるに巧思ある園藝家を以てしたるを見るべし、その構作精妙、歳月を經て愈々その景趣を加へ、天下有數の名園となりしも偶然にあらず、上の御茶屋の拜觀を畢り門を出で再びもとの道に出で南に向へば中の御茶屋なり。

中の御茶屋　上の御茶屋創建の時こゝにも一亭を築かせ給ひ、中の御茶屋と稱し樂只軒と號す、時に皇女光子内親王深く佛法に歸依し給ひ、御落飾の意甚だ切なるより、此離宮を賜ひて佛寺となし、「聖明山林丘寺」と勅號し、天和二年本堂造營成り、内親王を門跡となし給ふ。其後殿舍林泉年を逐ふて完備し、東山の一名刹となりしも、維新後いたく廢頽せしより、明治十八年、樂只軒を始め御由緒ある建物、及び境内二千餘坪の地を宮内省に奉還したるより、更に境界を立て修理を加へ、東上方にある堂宇等を林丘寺となし、西南書院林泉等は再び中の御茶屋と稱することゝはなれり。

正門西南に向ふ石階を登り、左折して行き百餘歩にして樂只軒に至る、即ち承應創立の時造營ありし所にして、後水尾法皇宸翰の御額あり、正殿六疊をはじめ、次の間八疊、龍田間と稱し北數室相連接す、外椽に出で階を經て昇ること數級、即ち正殿なり、入口廊下の杉戸祇園會山鉾の畫は住吉具慶筆といふ、二棟みな南面にして正殿は十三疊、北側に床の間及び棚あり、棚の數凡て五層、長短高低みな變化ありて極めて奇なり、下層に押入あり、其上には三角形戸棚あり、小襖に友禪染製造の圖を繪く、壁張付には離宮八景の詩畫、色紙にして當時雲上人の合作なり、各間襖及び壁張付の畫は、みな名匠の筆に成れり、東面折廻一間の内椽、杉戸の表裏に大鯉の網中にあるを畫く、また具慶の筆と傳ふ、俗にいふ此鯉魚靈あり毎夜出でゝ庭前の池水に游ぶ、故に後に網を畫かせ給へりと、南面みな林泉にして幽邃清楚なり、東北佛間をはじめ數室あり、外椽折廻りの欄干は、故さらに其柱を亂杭並となし、極めて奇なり、再び原路に還り左折して下の御茶屋に至る。

下の御茶屋　御茶屋三所の中最西部にあり、また最も低位にあり、書院十二疊東南

に面す、壽月觀と稱す、上段三疊、牀違棚袋棚等あり、襖繪虎溪三笑は岸駒筆、西南高所に一室十三疊、藏六庵といふ、壽月觀と共にみな後水尾帝宸翰額を掲ぐ、西面長窓あり、西方山野の眺望も佳なり、又茶室あり、みな雅潔優美を主として成る、西南みな林泉に向ひ、蒼苔徑淨くして潤泉石に咽び、上には雜樹柯を交へ婆娑掩映たり、また一小仙寰にして、遊憩少時萬斛の塵慮を滌ふに足る。

以上は修學院三離宮の概況にして、その規模の大形より工作の細微に至り、審かに記載するは拙き筆の能くすべきに非ざるを以て、今單に其の一班を記するに止むべし。之を要するに西に桂離宮あり東に修學院離宮あり、彼は深沈幽邃を主とし、此は高朗開豁を主とす、彼は曲折微妙を以て勝り、此は悠揚暢達を以て勝る、共に天下の名園にして、一たび之を拜觀するものは記者の言の妄ならざるを知るべし。

桂離宮

東は桂川に境し、西は西山一帶を望み、北は遙に嵐山龜山等を見る、四境幽閑にして仙寰の概あり、昔天正末年豐太閤既に天下を一統し、織田氏の遺緒を繼ぎ、尊王の旨を祖述し、人心を收攬せんと欲し、正親町帝の皇孫陽光院の第六子智仁親王を請ふて己が猶子と爲し、八條の宮と稱し奉り、爲めに別墅を桂の里に築く、即ち此の離宮なり、書院林泉共に小堀遠州の作にして、臺殿亭榭みな曲折刻畫を極め、樹竹水石妙趣を盡くさざるはなし、相傳ふ豐公の遠州に命じて之を造らしめらるゝや、遠州豐公に約するに三事を以てす、一に勞費を吝むなかれ、二に成功を急ぐなかれ、三に成功に至るまで來り觀る勿れ、恐くは作意紛出して作者の妨をなさん、此の三事を守るに非ずんば名苑成すべからずと、公之を諾し約を守り違はず、遠州即ち其徒弟出納大藏少輔、山科出雲守、倉光日向守、玉淵坊等と經營慘憺技術の秘蘊を盡くし、數年の工役を勞して之を落成す、地域總面積一萬三千百七坪、桂川を引き湛へて池となす、水

面の積二千三十四坪、島嶼十餘數あり、その後親王の第二世智忠親王、また遠州に命じ增築あり、寛永年間御幸殿新御殿等の新築あり、今に至り數百年、樹は益す蒼古に、石は益す劫奇、臺殿亭榭林影水光と益相得て深沉掩映、忽にして屈曲幽暗、忽にして平遠縹渺、造化の妙工、人作の精美、究竟に至らざるはなし、且つ其の建物の如きも總建坪四百五十餘坪にして、高低大小地に因り趣を異にし、柱楹窓欞より屏障の金具彫刻繪畫等に至り、一時の名手を驅り、巧思靈腕を揮ひたるを以て每間其宜きに適し、各室其奇を競ひ板せず複せず、好事者をして之に入らしむれば、前瞻後盻應接暇あらず、茫然歸るを忘れしむ、實に京都第一の名苑にして、恐らくは天下に其の比を見るを得ざるべし、故一品淑子內親王薨去の後明治十六年九月改めて離宮と爲し、現時は主殿寮出張所の管理する所となれり、今其の宮殿林泉を區別して見聞の大略を記せん。

宮殿　桂川橋を西に渡り川に沿ひ西北に屈折すれば北面に門あり御幸門といふ、平時は閉づ門內南に向ひ一道小石を敷く御幸道といふ、正面に中門あり。

中門　茅葺にして柱に櫪の皮付を用ふ、結構淡雅なり、門外に方四尺許の板石あり腰輿を置く所と爲す、中門に入り右折して橋を渡り、又小門に入り、斜に西に向ひ御車寄に至る。

御車寄　東向、前の飛石は遠州好み眞の飛石といふ、また大石を置き沓脫とす、六人の沓を駢ぶべきを以て六つの沓脫ぎといふ、玄關內四疊、左杉戸の表裏に虎と胡枝花、右は蘆に鷺、松に鶴の畫、共に永德の筆なり、槍の間を過ぎ、古書院に入る。

古書院　二間二十四疊、椽座敷七疊、外椽の北方楣間に桂亭の記あり、南禪寺傳長老の撰并に書にして、口を極めて離宮の勝概を誇詫せり、東西方二間許の竹椽あり、露臺なり、觀月の爲めに設けたるものといふ、椽を過ぎて圍爐裡の間に入る。

圍爐裡の間　又た伺候の間ともいふ、內に一疊大の洪爐あり、杉戸の表裡に諫鼓と花籠との畫は永敬の畫なり。

中書院　一の間六疊、一に山水の間と稱す、床の間張付及び襖みな探幽筆山水の畫あるを以て名く、袋棚小襖四枚に竹、拒霜花、水仙、菊の畫、及び棚下張付水邊樹木宿鴉の圖、皆な同筆なり、鴉の畫特に著名にして探幽三鴉の一といふ、脇張付に李白

觀瀑の圖、襖の張付山水樓閣も同筆なり。

二の間　八疊、七賢の間といふ、襖に竹林七賢梅花の畫は尙信の筆なり。

三の間　十疊、雪の間といふ、床に雪竹に雉子の畫あり因て名く、脇に梅及び襖の竹雪鷄雀樹木鳩蘆雁等同筆なり。

椽座敷　東南折廻り八疊、入口間杉戸の笠形取手は嘉長の作。

樂器の間　三疊、樂器を置きし所といふ、杉戸外面柳に鷺燕子花、內の方檜と蘆雁、共に海北友松の筆なり、南面に廣椽めり。

御幸殿　新御殿といふ、後水尾上皇東福門院と御幸の時新築せしものにして、山莊に擬し構造素樸、材皆な吉野丸太を用ふ、入口杉戸の畫內面竹林東坡、外面樹木尾長鳥の畫共に探幽の筆、引手兩面四季花手桶は祐乘の作にして足利氏の遺物といふ、長押は吉野杉にて長五間餘、釘隱は銀花金葉の水仙花嘉長の作なり、御椽座敷七疊半、滑敷居は東南に屈曲して七間あり、加藤淸正の進獻なりといふ。

一の間　六疊、上段間三疊、合天井槻板を用ひ棹を黑塗となす、眞の御棚は遠州好みの隨一にして、西北隅に屈曲して南端に付書院あり、棚の大小十餘あり、間架高低參錯して曲折の妙を極め、材には紫黑檀、紅花櫚、紅綠椅、梹榔、伽羅、唐桐、唐桑等、當時得がたき奇材を羅致したるものと見ゆ、開き小襖の山水人物、引違小襖上下凡て四張、上の樹木人物、下の荊棘、竹枝、小鳥等皆探幽の筆、此棚は世に桂棚と稱し、奇賞家は嘖々艶稱して世に比類なしといふ。

二の間　八疊、床一間、側に吹拔窓有り、遠州好みにして木爪竪形なり、一の間二の間の中央羅文樽は、黑漆鬆の細木を交叉して月字を現はす、襖引手は行體月の字にして、赤銅無地嘉長の作、筆者は鳥山若狹守といふ、皆桂の里の稱呼に因て月の字を賞用せしなり、次の間六疊、持袋棚二段、水屋五疊等あり。

御寢の間　九疊、劒璽の御棚一間二段、中棚にして板は筋違ひに吊る、前に綟子障子四枚あり。

御小座敷　四疊半、御化粧の間といふ、違棚は遠州の指圖にして、上持袋棚、小襖四枚蘭、菊、梅、牡丹、中棚下二枚は竹に燕雀外六枚、琴碁書畫等皆な探幽の筆なり。

御衣紋の間　三疊、傍ら袋戸棚あり、中三段御衣紋を納るゝ所といふ、御納戸八疊を經て後ろ廊下より御手水の間に次ぎ、御浴室及御東司あり。

以上は離宮正殿の大形にして、規模の宏壯なしと雖、雕繪の絢爛なしと雖、古撲淡雅の中に深沈緻密の趣を寓し、忽にして之を見れば只々是れ尋常數畝宮に過ぎず、仔細に點檢し來れば經營慘憺意匠の能事を盡くせり、世に稱す此の離宮を園中より望むときは樓船の姿を成し、古書院より御幸殿に至り逶迤雁行して趣勢極めて幽雅穩貼なりと、是より進むで此離宮に最も絶倫なる林泉の概況を記さん。

林泉　此の林泉は前にも記述せし如く、許多の歳月と不貲の勞費を積み、許多の更革を經たるものなれば、人工の極巧、宛然天然の如く、縱瞻橫矚皆な姿趣を成し、始め無く終り無く、環の端無きが如し、之を記するに宜しく何よりすべきを知らず、今假りに月波樓よりはじむべし。

月波樓　樓にあらず亭なり、位置高處にあり、東に向ひ、池面に映ずる月を望むに宜しきを以て白居易の月點波心一顆珠の句に取り付けしといふ、東北破風下に松花堂筆樓名の額を掲ぐ、一の間、七疊半、中の間次の間等あり、各室とも床の間を除き承塵なく、葭を以て昇り張りとし、竹を椽とし、藤繩にてからむ、襖は遠州の好みにして中央に透かし線子を張る、引手はみな杼形嘉長作、兩間の中央欄間一間、一半を隔子とし、一半を葭張りとす極めて奇なり、厨房板間の楣間に畫馬額を掲く、舊住吉神社にありしものといふ、外船に皇漢人乘合の圖にて、裏に慶長十年奉掛御寶前とあり、西南に錄形手洗鉢あり、小橋を渡り南の方池中に斗出する地角を龜甲と名く、龜甲の對岸池邊に紅葉山あり、許多の老楓叢生す、皆な名種にして秋晩霜後月波樓邊より之を望めば丹青煌燿名狀すべからず、紅葉山より水を隔てゝ松琴亭を望む、昔は朱欄干の大橋を架せり、當時泉石映帶の妙想見すべし、今は只南端礎石のみ存せり、石徑羊腸一昇一降林を穿ち水を渡り松琴亭に至る。

松琴亭　南方高處にあり四邊松樹多し齋宮女御の「琴のねにみねの松かぜかよふらしいづれの緒よりしらべそめけん」の歌意により名けしといふ、東摶風に松琴亭三字額は後陽成帝宸翰なり、書院茶室等遠州の最も心匠を費やせし所にして、瞪目諦視す

れば微に入り細に入り用意到らざるところなし、今その萬一を左に記すべし。

一の間　十一疊、床の間壁間及び襖等、青白二種の加賀奉書の方數寸あるを、石疊形に間錯貼附す、脇棚開戸下持袋棚小襖二枚の山水人物、及び横の方石爐の上に持袋棚小襖四枚水邊樹木小鳥等、みな探幽の筆、引手素銅結紐形は嘉長の作なり。

次の間　六疊、持袋棚小襖山水畫また同筆、欄間は麻殼の竪寄せなり。

御圍　四疊の内一疊大目なり、世に遠州八つ窓の御茶屋と稱し、亭中の神髓骨子とも云ふべきものにして、窓櫺朗明光線四隅に達し、茶家の艶稱して措かざる所なり、御床大目、東方壁に一窓あり、織部窓に似たり、一隅に棚二段あり柄杓を置く所とす、傍に袋掛の節枝有り、室の四外排石最も妙なりといふ、八窓の東池に臨み石を疊み手洗所と爲す、昔は流泉混々として淨く以て鹽漱に充て、流れの手水と名く、傍に石橋あり、長三間餘巾二尺餘厚一尺白川石にして東西に架す、加藤左馬助の進獻といふ、橋を渡り四腰掛を歴て蘇鐵山に至り待合あり。

四腰掛　九尺四方の萱葺土間にして、四面敞開、四方に各一の床を架し、略ぼ卍字形を爲す、故にまた卍字の腰掛ともいふ、待合の茶屋を去る程遠きを以て、中間の休憩所となしたるものゝ如し、東を流るゝ川を新川といふ。

待合　外腰掛けともいふ、傍に方二尺許桝形の水鉢あり、前の蘇鐵は島津氏の獻上といふ、松琴亭の正北池中石橋二、半島あり天橋立と名く、半島中紫色石は馬關産にして加藏清正の獻上といふ、松琴亭より西中島に土橋を架す、下を螢谷といふ、夏夕螢火多きに由り名けしものなり、傍近水中に河骨多し、中に紅河骨は珍卉にして世に稀なるものといふ。

賞花亭　中島の山上に在り、亭後櫻花多し、因て名けしものなり、又た龍田屋と稱するは、丹楓の風光亦た凡ならざるに由れり、參議雅經の詠に「花のみやあるじなるべき山里はもみぢの折もとひけるものを」とあり、全部構造茶店に模し、軒に暖廉を掛け、紺地白上りに龍田屋或はたつたやの文字を現はす、皆な青蓮院尊朝親王筆なり折廻り四疊敷腰掛あり、亭名額は竹内良尚親王の筆、亭前池に臨み石燈籠一基あり、銘水螢といふ、家仁親王の詠に「池ひそみうつれば水の螢かとむかふもあかぬ夜半の

燈」

園林堂　方凡三間、また中島にあり、西向、親王家歴代影像及び靈牌を安ずる佛龕にして、智忠親王の代に新造する所なり、壽量品の園林諸堂閣種々寶壯嚴の語を取り名けしものなり、堂名三字額は後水尾帝宸筆、本尊楊柳觀音畫像は寶鏡寺木覺院宮筆、離宮となりしより靈牌等は相國寺中に移されたり、堂前石燈籠二基あり、櫻花一株、重瓣にして南都の名種なりといふ、堂前土橋を西に渡り、左の方笑意軒に至る。

笑意軒　古句の一枝漏春微笑意の句を取り名けしものといふ、一の間、三疊、床の間前に付書院あり、後納戸三疊、御東司あり、中の間六疊、南方聯子腰張に、渡り初めの唐天鵞絨黒地輪な切に石疊みなるを貼附せり、次の間七疊半、西方袋戸棚あり、北方水屋に窓あり、忘窓といふ、造作の時篠竹一二枝と藤搦みを遺忘せしを、好奇的に之を存し、遂に窓の名となすに至れりといふ、南椽側より西南山野を眺望すべく、以て農作御覽に便ず、延享中親王手記に、茶屋中宜敷風景にて前は泉水後は野邊を見渡せり稲葉の體面白し後の藪三間程透させて風景殊によろしく往古後水尾上皇御幸の節後のやぶを切られ候由如何さま左樣なれば西山丹波山大方見へて景色猶可宜云々とあり、口の間四疊、襖の墨畫山水は尚信の筆、引手素銅地櫂形は嘉長の作、東南椽側杉戸、樹木に鳥の畫剝蝕して模糊不分明なり、椽側外矢形の引手は、質唐金丈二尺九寸許にして極めて奇なり、傳へいふ朝鮮國製作にして豐太閤の進獻なりと、次に御膳組の間二間、食饌調理の處にして棚架爐竈の微に至りまたみな意匠を凝らし裝置せり。以上は林泉中建造物の大略にして、此外尚ほ一二の古記に見へ今無きものあり、恐くは廢頽して撤却したるものならん、凡て林泉中亭榭の數七橋を架すること十六、燈籠の數二十五、手洗鉢の數八、多々益々變化を生じ、一箇の重複を見ず、掩映點綴以て林泉の奇觀を大成す、その他名花異卉奇石佳木の形狀出處等、精細に叙し來れば僕を更ふるも暇あらざるを以て之を略す、之を要するに此の林泉は所謂四方正面に築造したるものにして、宮殿亭榭曲徑細溪に至り、何れの邊より眺望するも側面の所なく、面を易へ頭を換へ變化究りなく、殆んど端倪すべからざるの妙あり、人工の極致獨り造物の創成を髣髴するのみならず、遂に能く化工の未だ至らざる所を補ふに至る、賑

320
323

草に此の御庭の風景又となし、宮島の景色を感じぬるかこの御庭の風景と只二つはいける内の見物なりし云々とあるもあながち過賞といふべからず。

終

昭和四年一月廿五日印刷　同年一月廿九日發行　〔非賣品〕
編輯發行兼印刷人　東京府荏原郡碑文谷村赤堤五二四　川上邦基